

令和6年度

文学部第3年次編入学者選抜学力試験問題

専門科目

言語文化学科 日本アジア言語文化学コース

注 意

1. 解答は、別冊の解答用紙の所定の解答欄に書くこと。
2. 問題は、I～IIIの3題ある。
I ———— 国語学
II ———— 古文
III ———— 漢文
3題とも解答すること。
3. 総ページ数 ———— 4ページ
問題ページ ———— 第2～第4ページ
(第1ページは白紙)
4. 試験終了後、この冊子は持ち帰ること。

I つぎの問に答えよ。

問一 「連濁」という現象について、具体例を挙げつつ、概説せよ。現代語でも古典語でもよい。

問二 現代語における「形容動詞」について知るところを述べよ。その際、必ず古典語の形容動詞にも触れること。

問三 左に挙げる資料について、答えよ。

(a) 資料名を記せ。

(b) どのようなことが記されているか、また、これが日本語史上においてどのような価値があるか、説明せよ。

資料は、著作権の関係で掲載しておりません。

II つぎの文章は、後鳥羽院の時代における宮中での花見のことを記したものである。これについて、後の間に答えよ。

かくて月日もはかなく過ぎて、春にもなりぬ。世の中ものどかなるさまなれば、和歌所の人々、少々参り合はれたりしかば、「今は世の花も、盛り過ぎぬらむ」と、「大内の花、散らぬさきに」と、やがて引き連れて、車二両に込み乗りてまかれり。もとより群れあたる大徳、あるは①由ばめる女房も、多くさまよひありく。②この人々と見て、いかでか心遣ひもせざらむ。うなづきささめきて、歌どもこなたかなたより持て集ふ。御階のほどに円居して、連歌などし侍りて、やがておのおの歌を詠む。花一枝折りて、歌を置く。中将定家の詠まれたりし、
2年を経てみゆきに慣れし花の蔭ふりゆく身をもあはれと思ふ
はらからに法橋最栄、いざなひ具せられて侍りし、

A 納まる花はゆづらばとく

ちよあひまはるはるあつち

「これらは良し」など、その座の人々申しあへりしかば、とりわきて記し侍るなり。

さて帰りなむとするに、女房のさし寄りて、「花一枝折りて給へ。知らぬ人をば御所守りの諫め侍り」と申すは、中原宗安申しかけし、

B 折れと言はばいとまかしこし桜花

あぬるひをを神もよるよ

返しも侍りしを、忘れにくちをしさよ。弥生の十日あまりの月はなやかにさし出でて、まかり帰る。「3たつ事やすき」と誰も誰も思へるに、③かごとがましまで花はこぼれ落つ。月花門のほとりに、笙の笛を吹き鳴らしたりしかば、笛を取り出でて吹きあはす。少将雅経の筆策吹きおく。建春門より出でて、待賢門よりおのがじし名残惜しみてまかり帰りにき。

かく花見に引き連れてまかりぬるよしを聞こしめして、夜更くるほどに帰り参りたりしかば、召し寄せて、「誰れか誰れか、心とまる歌詠めりつる」など問はせ給ふ。この中将の「みゆきに慣れし」と詠めりつる歌を語り申す。「4誘はれざりけるこそくちをしけれ」とて、笑はせ給ふ。「うらやまし。明日行きて御覧すべし」と仰せあれば、さも参りぬべききはの人々に、夢見せに遣はす。

(『源家長日記』による)

(注) ①大内——宮中。宮中のなかに花の名所があった。 ②大徳——僧侶。

○法橋最栄——筆者の兄。「法橋」は僧侶の階級の1。

問一 傍線部①「由ばめる」、②「かごとがましまで」を現代語訳せよ。

問二 傍線部1「この人々と見て、いかでか心遣ひもせざらむ」について、

(a) 「この人々」が指すところを明らかにして現代語訳せよ。

(b) 「心遣ひ」とは、具体的にどのようなことか、説明せよ。

問三 傍線部2「年を経てみゆきに慣れし花の蔭ふりゆく身をもあはれと思ふ」の歌について、歌中に用いられている修辭を指摘したうえで、解釈せよ。

問四 本文中で影印になっているA歌一首とB歌の下旬について、音数律に留意して翻字せよ。漢字とかなの区別はもとのままとすること。

問五 傍線部3「たつ事やすき」は、左の古歌の一部を引用したものである。「誰も誰も思へる」とはどのような思いを抱いたのか、説明せよ。

今日のみと春を思はぬ時だにもたつ事やすき花の蔭かは

(古今和歌集・春歌下・凡河内躬恒)

問六 傍線部4について、「くちをし」とは誰のどのような思いを表しているか、本文をふまえて説明せよ。

問七 二重傍線部「和歌所」について、ここでは具体的にどのようなものを指すか、文学史的なことがらにもとづいて説明せよ。

III つぎの文章について後の問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点・送りがなを省いた箇所がある。

衡州有^ニ一老父^一、荷^レ担^ヲ売^ニ生姜^一三十余年、老稚見^ル之^ノ顔貌
不^レ改^マ。或^ハ問^フ之^ニ、曰^ク「吾所^レ居^ル在^ニ回雁峰^一、後^ニ人跡罕^ナ至^ル、人
亦^タ不^レ暇^{アラ}訪^フニ吾廬^一也」。一日、有^リ二道人^一延^マ入^ニ茶肆^一。会^シ曰^ク「吾
有^リ黄白之術^一、求^メニ其常德^一者^一授^ク之^ニ。吾見^ル翁^ヲ数十年未^ダ曾^レ改^メ操^ヲ、
吾将^レ遺^ラニ翁^ニ此術^一、如何^ト」。翁即^チ就^キニ担^中取^リニ姜一塊^一納^メニ口
中^一、少頃^シ取出^リ已^ニ成^レニ黄金^一矣。②乃笑^ヒ曰^ク「吾有^ルニ此術^一尚^ホ不^レ
為^サ、況^シ其他^ヲ耶」。市人驚歎^シ聚^ム觀^ル、若^クニ便旋^一而失^フ之^ヲ。③自是^レ之
後、亦^タ不^レ復^タ見^ル其人^ヲ矣。

(注) ○回雁峰——衡山の南にある険しい峰の名。 ○茶肆——茶館。 ○黄白之術——鍊金術。 ○便旋——回転。

(宋・王明清『投轄録』による)

問一 二重傍線部①・②・③の文中での読みを、ひらがなのみを用いて示せ。

問二 傍線部1の「如何」について、

(a) 道人はどんな提案について「如何」と問うたのか、説明せよ。

(b) 道人はなぜそのような提案をしたのか、説明せよ。

問三 傍線部2を「此術」の内容を明示して現代語訳せよ。

問四 傍線部3について

(a) 漢字ひらがなまじりで書き下せ。

(b) 「其人」が指すところを明示して現代語訳せよ。